

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

存在の連鎖としての宇宙という発想、およびその根底にある原理—充滿、連続性、段階性/グラデーション—が最大の広がりを受容を見せたのは、18世紀のことでした。

これは一見すると、いささか奇妙に思えます。プラトンとアリストテレスにその発生を負い、さらにその体系化を新プラトン主義者たちに負う各種の観念が、これほど後になってから結実したというのは、意外に思えるのも当然です—特にその18世紀の（おおよそ）第一四半期から第三四半期までを見ると、こうした想定とは相容れないように見えるものが、知的な流行に大量に見られたのですから。

アリストテレスのご威光は、当然ながら、とっくに消えていました。スコラ学やその手法は、「啓蒙主義」を自負する人々の間では、通常は軽蔑と嘲笑のネタでした。思索的な、アプリアリな形而上学への信仰も停滞していたし、ベーコン主義的な気質（ベーコン主義的な手法そのものではないにせよ）、つまり辛抱強い実証的な検討という精神は、科学における勝利の行進を続けており、一般教養ある社会の相当部分の間では熱烈な支持を受けていました。そして、存在の連鎖という概念は、その根拠となる想定と共陰、明らかに経験から導かれた一般化ではなかったし、実のところ自然についてわかっている事実とも、なかなか相容れないものではあったのです。

それでも、各種の論者—科学者、哲学者、詩人、通俗エッセイスト、弁論者や正統神学者—が存在の連鎖についてこれほど語った時期はそれまでなかったし、それと関連する観念の全般的な仕組みをこれほど暗黙に受け入れたこともなく、そうした観念からそこに潜在する意味合いや、顕在した意味合いをこれほど大胆に引き出したこともありませんでした。アディソン、キング、ボリングブローク、ポープ、ハラール、トムソン、エイケンサイド、ビュフォン、ボネット、ゴールドスミス、ディドロ、カント、ランベルト、ヘルダー、シラー—こうした人々やこれに劣る各種の論者たちが、この主題について詳しく述べたばかりか、そこから新しい、あるいはそれまでは避けられてきた結論を引き出したのです。その一方で、ヴォルテールやサミュエル・ジョンソン（戦闘仲間としては奇妙な取り合わせです）は、この発想すべてに対する攻撃の先鋒となりました。18世紀においては、「自然」という言葉に次いで「存在の大いなる連鎖」は神聖な用語となり、19世紀末におけるあの神性な言葉「進化」といささか似たような役割を果たしたのです。

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

おそらく、この概念が18世紀に大流行したのは、別に何やらギリシャ哲学や中世哲学の直接の影響が主因ではなかったでしょう。というのも、これは17世紀末の、その後五十年にわたり世評も影響力も最大だった哲学者二人がこだわった概念だったからです。ライプニッツはこの古代のテーゼをしつこく繰り返しましたし、ジョン・ロックも、熱狂ぶりには劣るものの、その明言ぶりではひけを取りませんでした。

目に見える現世世界のすべてには、裂け目やギャップは一切見あたらない。我々人間以下、下降は細かいステップによるもので、しかも連続した系列になっており、それぞれが前の一段からほんの少しだけちがうものになっている。翼を持ち、空の領域にも馴染みがある魚もいる。そして水に暮らす鳥もいて、その血は魚のように冷たい。(中略) 鳥と獣の両方に実に近い親類の生き物もいて、両者の中間である。両生類は、陸棲と水棲をいっしょにつなげている(中略) マーメイドや人魚男としてしっかり報告されているものは言うまでもない。一部の類人猿は、人間と呼ばれている一部の連中と同じくらいの理性と知識を持っているようだ。そして動物界と植物界もきわめて密接につながっているので、動物の一番低いものと、植物の最も高いものを取るなら、両者の間のちがいはほとんど見て取れない。そしてそのようにして、物質の中で最も低く最も非有機的なものまで、いくつかの種はお互いにつながり、きわめて知覚不能なくらいの差しかないカタチで続いているのがどこでも見られるのである。そして造物主の無限の力と英知を考えるなら、宇宙の偉大なる調和と、その建築家たる神の大いなる設計と無限の善性からみて、生物種もまたゆるやかな段階により、我々人間からの段階的な下降でもいたように、人間から上の方へと神の無限の完全性に向けて上昇するのがふさわしいと考えてよいのではないか。

アディソンはこのプラトン主義形而上学のこの側面を、哲学者や神学者の作品など読まない世間にもお馴染みのものとししました。彼は『スペクテーター』誌でそれに何度も言及したからです。たとえば519号にはこうあります。

無限の善性は実に伝達的な性質を持つので、知覚ある存在のあらゆる水準に存在を与えるのに大喜びするようだ。これは私がしばしば自ら大喜びで追求した思索であるため、我々自身の範囲に見られる部分の存在の位階を検討することで、それをさらに敷衍することにしよう。触感と味覚以外の感覚を持たない(中略) 数多くの生物がいる。(中略) 実に段階的な進歩によって生命の世界が多種多様なバラエティの生物を経て進み、やがてはあらゆる感覚を備えた生物となる様子を見るのはすばらしい

¹ *Essay concerning Human Understanding*, III, chap. vi, § 12. ロックはライプニッツとはちがって、連鎖の充満性と連続性がア priori に必然だとこだわったりはしない。この理論が単に「考えられる」と言うだけである(ibid.)

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

ものである。(中略) この後で、いくつか内面の狡智や機転の完成具合、あるいは一般に本能と呼ばれるものを見るなら、これまた同じ形で高まり、それとわからないほど次々に高くなって、置かれた生物種に応じて追加の改善を与えられるのである。自然におけるこの進歩はきわめて段階的であり、劣った生物種の最も高い存在が、そのすぐ上にいる最も不完全なものにきわめて近づく。(中略) また善性は、生き物の多数性に負けず劣らず、多様性にも見られるのである。もし神がたった1種類の生物しか創らなかったら、その他のすべてはどれも存在の幸福を享受しなかったであろう。したがって神は、その創造の中であらゆる生命の度合い、あらゆる存在能力を指定したのである。自然における亀裂のすべては、植物から人間に到るまで、多様な生物種で埋められ、それらは一つまた一つと実にかすかで細やかな上昇により折り重なっているため、一つの種から次の種への細かい移行や差異はほとんど感知不能なほどである。この中間の種は実にうまく養われ管理されているので、生命の世界のどこかに登場しない知覚の度合いはほとんど存在しないも同然である²。

別の論者、英国国教会の聖職者エドマンド・ローは、この創造の「充満性」という図式にさえ満足できませんでしたが、アディソンを引用したうえで、それぞれの生物種の中には、存在できる限り多くの個体が生み出されたにちがいない、と付け加えています。

この存在の大いなる連鎖においては、いかなる種類の亀裂も空虚もなく、欠けたリンクもないという指摘とそれについての理由から、あらゆるちがった秩序、あらゆる階級または種類は、その性質が認める限り、あるいは神が適切と考えた限り充満しているということがきわめてありそうである。それぞれの分類にはお互いにある程度の不都合や不穏さを生じさせずに共存できる限りの個体がいるのだろう。確実に言えるのは、そのものの性質における不可能性や、何かより大きな不都合以外のどんなものも、神の力の行使を制約できないし、神がますます多くの至福を得られる生物を生み出すのを止めることもできない。(中略) 我々は、すべてがその種の中でできる限り完全であり、あらゆる体系はそれ自体が充満して完全なのだ³と結論すべき最大級の理由を持っているのである³。

こうした全般的なアイデアに与えられた多くの特別なひねりの中から、今回の講義では人間について導き出された話をいくつか検討しましょう一位階の中での人間の地位、その性質、そしてそこから得られる倫理的な結論です。

² アディソンはこれを裏付けるものとして「ロック氏」を引用している。

³ Law 版の King による *Essay on the Origin of Evil* (1732), 143 n.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

A. 存在の連鎖と自然の中の人間の居場所

すでに、世界の無限性と生命が住まう天球の複数性という信念—それ自体が、充満の原理から導かれたものです—が、宇宙体系の中での人間の居場所と、その結果について与えた影響については検討しました。

この信念は、すでに見たように、予想されるほど（そしてしばしば思われているほど）は人間の自尊心を損なったりはしませんでした。しかし、充満して無限のグラデーションを持つ存在の居合いという概念が、人間の宇宙的な重要性和独自性についての見立てをまちがいなく引き下げた含意が四つありました。そしてこれらは、18世紀の哲学者や、哲学思想の解説者たちが大いにこだわった点なのでした。それらを挙げると：

1. 万物は人間のためではなく、それ自体のために存在する
2. 位階の中で人間は、中間ではなく底辺近くになった
3. 人間の高い地位は失われ、サルに毛が生えた存在にすぎなくなった
4. 心と精神を両方持つ気高い存在のはずが、最低の精神しかない存在になった

[訳注：原文にはないが各説明が長すぎて見通しが悪いので、まず一覧にしておきます]

1. 万物は人間のために存在するのではない

充満の原理により、存在の連鎖のあらゆるリンクは、単に、そして主に他のどんなリンクの便益のために存在しているのではなく、それ自身のために存在しているのだ、ということになりました。もっと厳密には、形相の系列の完全性を実現するために存在するのだ、ということです。そうした系列の完全性を実現することこそ、神がこの世界を創造した主要な目的だったからです。すでに見たとおり、本質は尊厳においては不平等ではありますが、みんな存在する権利は理性的な可能性の範囲で平等に持っています。したがって、ある存在の種の真の存在理由は、決してそれが他の種に与える効用に求めてはならないのです。しかしこの意味合いは、人間を大いにヨイショする古い想定（17-18世紀にはまだ残っていました）と対立するものとなりました。弁神論、正統派を問わず教化作品の著者にずいぶん愛された「物理神学」は、意図としては神の存在を証明するものでした。しかしそれは実質的には人間をまつりあげる理論だったのです。というのもその相当部分は、他のあらゆる被創造物は、人間のために存在するという想定に基づいていたからです。 *Tout est créé pour l'homme* [すべては人間のために創られた] は、18世紀の「哲学的」産物として実に大きな割合を占める、あの長い一連の目的論的な議論の暗黙の前提であると同時に、勝ち誇った結論でもあったのです—そしてそれは、人間の愚劣さの最も珍妙な記念碑の一つです。この期に及んで、単

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

に中世でしばしば聞かれた潮流を繰り返すだけなのですからね。スコラ哲学の主要な教科書はこう宣言しています。

人間は神のために創られた、つまりは神に奉仕するために造られたのであり、同様に世界は人間のために、人間に奉仕するために造られたのである⁴。

ベーコンはこの主題を詳述しています。

人間は最終動因を求めるなら、世界の中心と見なせるであろう。つまり、もし人間が世界から取りのぞかれたら、残りの世界は路頭に迷い、目的も狙いもなくなってしまう(中略) 何にも向かわなくなってしまうはずだ。というのも世界全体は人間に奉仕するために力を合わせているのである。そして人間が利用と果実を引き出さないものは何もない(中略) このため万物は人間の仕事をこなして、それ自身の作業をしているのではないように見えるほどだ⁵。

17世紀末のあるプロテスタントの神学研究で、18世紀に大いに崇拜されたものにはこうあります。

宇宙の最も美しい部分の卓越性を何が構成しているか細かく考えるなら、それらは我々との関係においてのみ、価値があることがわかるであろう。我々の魂がそれらに価値を付与する限りにおいて、それらには価値があるのだ。人間の尊厳こそは、岩や金属の主な尊厳を構成するものであり、植物や樹木や果物に価値を与えるのは、人間の仕様と飲むのである⁶。

フェロン曰く「自然では植物だけでなく動物も我々が使うために作られている」。捕食獣はこの例外に思えるかもしれませんが「あらゆる国に住民がいて、あるべき形で法と秩序の下に置かれたら、人間を攻撃する動物はいなくなる」。しかし獰猛な動物もまた人間に奉仕するもので、それは人間の身体能力と勇気を養うためと、世界平和を維持する手段として、なのだそうです。というのもフェンロンもまた、人間は「戦争の道徳的な代替物」が必要だという感覚を持っていたのです。そこで、僻地に「凶暴な動物」を維持して、それらに対して戦闘傾向のはけ口を必要とする人々が埋め合わせをするわけですね。そして、人間がお互いを殺さずにすむように、他の生物種で戦う生き物を提供したことで、自然の恩寵は大いに

⁴ *Libri sententiarum*, II, 1, 8.

⁵ *De sapientia veterum in Works*, Ellis and Spedding ed., VI, 747.

⁶ Abbadie, *Traité de la vérité de la religion chrétienne*, pub. 1684; 7th ed. (1729), I, 95.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

示された、ということになります⁷。ベルナルダン・ド・サン＝ピエール—彼の『*Eludes de la Nature* [自然研究]』(1784)はこのジャンルの傑作とされます—によれば、創造主が目指すのは「人類の幸福だけである。あらゆる自然法則は人間のニーズを満たすように設計されている⁸」。

存在の連鎖という発想の論理は、この他の創造物が人間の善の道具でしかないという考え方に強力に対立するものだったし、それだけでなく—そこまで露骨ではありませんが—目的論的な議論一般の前提にも逆らうものでした。とはいえ、こうした人間の虚栄に対する反発は、他の考察からも導き出されてはいたのですが。ガリレオはこう書いています。「人間のお世話こそが神の適切な御業で、その目標より外には聖なる叡智と力が広がらないなどと思いつくのは、あまりに傲慢である⁹」。ヘンリー・モアは明らかに充満の原理の影響を受けて次のように宣言しています：

我々から見て実に卑しき害獣としか思えないものに対し、これほどの慎重な配慮がなされていることに(中略)騒ぎ立ててはいけません。というのもそれは虚栄と無知あるいは傲慢な思いこみから出た、万物は何らかの意味で人間のために造られているという信念を奨励されているために、そうした動物がすべてそれ自体のために作られているようなことがまったくないという考えに基づいているからである。しかしそんなことをのたまう御仁は、神の性質とものごとの知識について無知なのである。というのも、善人は自分の獣たちに慈悲深いではないか。それならば、善なる神だってまちがいに恵み豊かで優しいはずだし、自分の創造物で生命と感覚を持ち、楽しみを少しでも感じられる生き物すべてが、自らを楽しめるということにお慶びになるはずである¹⁰。

しかしながら17世紀において、人間中心的な目的論のみならず、科学におけるあらゆる目的論的な理由付けの形すべてに対する反対の急先鋒は、デカルトでした。他の反対論に加えて、彼はこの理論が明らかな事実と反していると考えました。

あらゆるものが我々だけのために作られ、神がその創造において他の目的を考えなかったなどということは、まったくもって考えられない。(中略)こうした想定は、

⁷ "On ne trouverait plus d'animaux féroces, que dans les forêts reculées, et on les réserverait pour exercer la hardiesse, la force et l'adresse du genre humain, par un jeu qui représenterait la guerre, sans qu'on eut jamais besoin de guerre véritable entre les nations." [もはや凶暴な動物など遠くの森林にしか見あたらず、我々はその獣たちを、戦争を表すゲームを通じて、人類の大胆さ、強さ、技能を行使するために温存し、それにより国民同士の本当の戦争が決して必要ないようにするのである] *Traité de l'existence de Dieu*, I, 2.

⁸ Mornet, *Les Sciences de la nature en France au 18e siècle* (1911), 149 ff. での引用。この部分には、こうした愚にもつかぬ記述がいろいろ精選されている。

⁹ *Dialogo di due massimi sistemi*, III, 400.

¹⁰ *Antidote against Atheism*, II, ch. 9, 8.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

物理的な問題の理由付けにおいてきわめて役に立たないと思う。というのも、無限のモノが存在することは疑えないし、あるいは存在していたがいまや存在していないものがあることもひていできない。そうしたものは人間が見たことも理解したこともないわけで、したがって人間にとっていささかも役にたったはずはないのである¹¹。

実際、17世紀のえらい哲学者のほとんどは同じ意見を繰り返しています。ライプニッツははっきりと *non omnia hominum causa fieri* [すべてのものが人間のためにあるわけではない] というテーゼについてスピノザと同意すると明言しています¹²。「我々が世界で快くないものを見出すのは」別に驚くべきことではない、「というのもそれが我々だけのために作られたのではないのはわかっているから」と彼は述べます。キング枢機卿は、「地球が人類のために作られ、宇宙のために作られたのではない」などと思うのは「バカげている」と述べます。そんなことを考えるのは「虚栄と無知に目がくらんだ者だけ」なのです。同じ主張は、ボリングブロークのキング以外のあらゆる「聖職者」にケンカを売る作品『断片』や、ポープがおそらく『第一書簡』や『人間論』のほとんどのネタ元にしたと思われる『エッセイ概略』などの主要な目的となっています。ここでは弁論論者と正統教義の代弁者たちの意見が見事に一致します。確かにボリングブロークは、あらゆる神智学的な思索や、至高の神とこっそりお話をしているなどという弁論論者の気取りをすべて論難します。そしてプラトンとその支持者たちに立ちしては、古代の人だろうと現代人だろうと、ことさら情け容赦なしに手厳しくバカにしてみせます。しかし彼もまた最終的には、自分が「あらゆる自然の作者の設計」を完全に知らないわけではないと静かに認めます。宇宙の仕組みの完全性こそは、宇宙の真のレーズンデートルだとボリングブロークは確信しています。「無限の叡智が、人間を創ったりする理由は」いや、連鎖の他のどのリンクだろうと「幸せな生物を作る以外にあるなどと」考えるべき理由はないというのです¹³。

この地球の感覚ある住民たちは *dramatis personae* [芝居の登場人物] のようにちがった正確を持ち、あらゆる場面でちがった目的の活動に適用されている。物質世界のいくつかの部分、は、劇場の装置のように複雑だが、それは役者のためではなく、アクションのためなのである。そしてこの芝居の秩序と仕組みはすべて、そのどちらでも改変されてしまえば、無秩序になりダメになってしまうのである¹⁴。

¹¹ *Principia*, III, 3.

¹² Leibniz, *Philos. Schriften*, I, 150.

¹³ *Fragments, etc.*, in *Works* (1809), VIII, 169.

¹⁴ *Ibid.*, 232. Cf. また *Fragments*, LVI, *ibid.*, 288-289: 「もし神の属性が、物理的、道徳的な邪悪などないように求めていたのであれば、人間は自分だけの利用に供され、自分の幸福の場面となる世界の最終動因と明らかになっていたであろう。この世界は、明らかに宇宙の最終動因となっていたはずだ。あらゆる惑星は我々の惑星に隷属して回転し、恒星自体も夜にきらめいて天蓋を飾る以外の目的を果たさなかったはずである」。この下りは Pope, *Essay on Man*, I, 11. 131-140 で韻文として増幅されている。人間中心主義的な目的論に対する18世紀における最もウィットに富んだ攻撃は、ヴォルテールの *Essai sur l'homme* (1738) の第6講。

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

つまり宇宙は、あらゆる可能な存在の形相が自分の種類に応じて自己表現するために作られたというわけです。だから、現代の論者が *point de vue spectaculaire* [スペクタクルな視点] と呼んだもの—世界が人間のニーズや希望に適合してくれるという信念ではなく、そのスペクタクルとしての無限の豊かさと多様性、それが示す複雑でしばしば悲劇的なドラマのとんでもない広がりから生じる、世界への宇宙的な敬虔さとロマン主義的な歓び—は18世紀初頭には、決して馴染みのないものではなかったのです¹⁵。この実に多くの18世紀論者お気に入りのテーゼを最も簡潔にまとめたのは、ゲーテの詩 *Athroismos* (1819) でした:「あらゆる動物はそれ自体が目的」:

Zweck sein selbst ist jegliches Tier.

2. 位階の中で人間は、中間ではなく底辺近くに

似たような結論として二番目にくるのは、存在の連鎖における人間の相対的な立ち位置として受け入れられたものから出てくるが多かったのです。これについて一般に言われていたのは、すでに見た通り、人間は連鎖の中の「中間のリンク」だというものでした。これは必ずしも、あるいは（私が思うに）通常は、人間の上にいる種別と下にいる種別が同数だという意味ではありませんでした。それどころかロックは、「我々は上の位階にいる生物種のほうが、下にいるものよりはるかに多いと納得すべき理由がある。我々は完成の度合いという点で、最低の状態で無に最も近い存在からの距離よりも、神という無限の存在からの距離のほうがずっと遠いのである¹⁶」と考えていました。アディソンはこの議論をさらに先鋭化します。上方の「空間と余地」は無限であり、そしてそのすべてが埋まらねばならない。しかし下の位階の数は有限なのです¹⁷。だから人間は序列における半ばではなく、その中でもはるか下の加減にずっと近いのです。人間が「中間のリンク」なのは、単に知覚力があるだけの存在から知的生命形態への移行点にいるという意味でしかありません。これは人間について、得意になるような見方でしょうか、卑下するような見方でしょうか？ 文字通り中間点という概念を構築した詩人ヤングにとって、それは人間がかなり自分を高く評価してよい地位のように思えました。人間は:

*存在の果てしない連鎖における傑出したリンク
無から神への中間点*

¹⁵ Cf. また John Hawkesworth の詩, "The Death of Arachne," Pearch の *Supplement to Dodsley's Collection of Poems*, 4 vols., 1783, vol. III, 183 所収.

¹⁶ Locke, loc. cit.

¹⁷ Addison, *Spectator*; loc. cit. Cf. また Bolingbroke, *Fragments in Works* (1809), VIII, *Fragment 44*, 186.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

しかしこの理論が人間に割り振った地位について考察するほとんどの人からすると、これは謙虚になるべき理由をさらに付け加えるものでした。天使よりちょっとばかり低い地位を与えられたとはいえ、天使の中でも最低のどん底以下ですし、その他霊的な存在よりも下なのです。そして人間の上に続く階層は実に無数であり、それを考えてしまうと、一種の人種劣等感が自然に生まれてしまうことになりました。サー・ウィリアム・ペティはこう書いています(1677):「こうした生き物の位階を考える主要な使い道は、神の下に下手をすると何百万もの人間より優れた生き物がいることを思い知らせることなのである。だがこれまで人間は一般に、自分が最高であり神の次の地位を占めると思い込んでいたのだ」。というのもこの位階は人間に「恒星の球体の(中略)中にいる存在は、尊厳においても弱さにおいても、人間が最も卑しい昆虫より優れているのとは比較にならないほど、人間より優れている存在がいる¹⁸⁾」ことを示すから、というわけです。1710年にある貴婦人は次のように書いています—その一節の書きぶりは、こういう考え方がいかに当時通例だったかをよく示しています:

(前略)もし(中略)第1原因から最も知覚不能な結果に到る存在の位階があるとさらに考えるなら、妾共の下に無数の存在の群れが見られ、それぞれの生物種が下るにつれてその種類として完全性が劣り、それが点、不可分な固体にまで続くのであれば、同様に妾共の上にも無数の数の存在がいて、人間がつまらない昆虫や最小の植物を超えた存在であるのと同じ位人間を超えた存在がおり、そして最も高き天才、理性の最大の名匠、最も啓発され疲れ知らずの知識探求者に比べれば赤子同然で、叡智の一群における最低の形相になる資格すらないも同然の存在にすぎぬ人間は、自分自身については卑下するしかなく、己の傲慢さに赤面し、自分たちの愚行のいくつかの事例については恥ずかしく振り返るしかないように思うのでございます。

妾が考えるに、かの明晰なる知性(中略)その性質の尊厳により崇高な地位にまで高められ被創造精神が至高の善性と持てる最も親密な結合に到った存在が、人間たちを軽蔑する微笑で眺めており、しかしその軽蔑には哀れみが混じっているのが見えるのでございます¹⁹⁾。

アディソンは数年後に、これを単純に濃縮してみせました。「最も卑しいものから最も高いものまで存在が徐々に高まるという概念が空疎な想像ではないなら、人間が理性的自然に最も近い生き物を見上げると同様に、天使が人間を見下すというのは充分考えられる

¹⁸⁾ *The Petty papers*, ed. by the Marquis of Lansdowne (1927), II, 24, 32. ペティの純粋哲学への主要な試みは「生物の位階」に関する論説の素描であったが、未発表に終わった。彼は自分がこの観念を独立に思いついたと信じているが、これはきわめて考えにくい。

¹⁹⁾ *Essays upon Several Subjects in Prose and Verse Written by the Lady Chudleigh* (1710) 123.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

20」。哲学者フォー銘は、初めて存在の位階という概念に接したときに似たような印象を受けたと報告しています。

自分を他の存在に勝る優れたものだとする理由がいかに少ないことか、そしてどうやったらプライドの動機を引き出せるというのか？ 以前の私は、自分が神の被創造物の中で最も優れた存在の一つだと慢心していたものだが、いまや己の妄想がいかにひどかったかがわかる。自分が位階のどん底近くにいるのがわかり、自慢できることといえば、理性なき生き物よりはちょっとばかり優れているというだけだ。そしてこれですら常にそうとは限らない。というのも私にはない優位性を持つ存在が実にたくさんいるからだ。それどころか、自分の上に山ほどのずっと優れた知性が見えるではないか²¹。

もちろん、人間より優れた多くの「知性」の階級があるというこの信念は、ちっとも目新しいものではありません。これまで引用した下りはどれも、単にそれが広まっていたこと、それが存在の連鎖全般の仕組みにおいて哲学的な基盤として認識されていたこと、そしてそれが人間の自己認識に与えた影響を例示するだけのものです。しかし18世紀には、この信念はもっと自然主義的な形を採るようになりました。これは、ボリングブロークのいくつかの下りに示されています。「ほとんど存在していないようなものから人間まで」破れない存在の連鎖があるということを、彼は観察で証明されたことだとしており、そして彼がバカにしたスコラ学者たちのように、実証的な証拠はないとはいえ「それが神の無限の下自然ながら人間より大幅に優れたものにまで続くと我々を納得させる、きわめて蓋然性の高い理由を持っている」と述べるのです。しかしこうした優越した自然は彼にとっては天使の階層ではなく、この太陽系や他の恒星系の天球の住民たちに過ぎないのでした。この人間より高いリンクの存在について信じている理由について、彼は一般的な充満の公理を補う、おもしろい説明をしています。人間の知的能力が、実にはっきりと有限な知能の最大の可能性にすらはるかに満たない、というのがその理由です。

無数の世界や世界系がこの驚異の全体である宇宙を構成することは疑問の余地がない。そして、太陽のまわりを回転する惑星や、無数の他の恒星のまわりを回転する惑星のうち、そこの住民として適した生き物が住んでいることについても、疑問の余地は同じく小さいと思う。この視野を眼前に見るにつけ、理性的な被創造物の中で、人間だけが唯一の、あるいは最高の存在だなどと想像するほど、愚かだったり虚栄まみれだったり出過ぎたりすることなどできるだろうか？ 発狂して理性—いや理性の不完全性—が使えなくなったりしたのでない限り、意識を持つはずの我々が？ む

²⁰ *Spectator*, No. 621, Nov. 17, 1714.

²¹ *Philosophical Miscellanies*, English tr. (1759), 107 ff.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

しろ、動物から感覚や知性のグラデーションが、顕微鏡の助けを借りない限り、いやそれを使っても見分けのつかないほど細やかに人間まで続き、しかもその人間が動物としては最高の水準とはいえ感覚や知性がきわめて不完全なことを考えるのに、人間からも、各種の感覚、知性、理性の形態を通じ、あまりに遠いところにいるので我々には知られ得ぬ存在へと上がるグラデーションがあると納得すべきではないだろうか。その存在は知的体系においての位階が、我々の思いもよらぬほど高いのである。この体系は、肉体の体系と同様に（中略）聖なる精神がそれを存在させる以前からその御前にあったはずである²²。

要するに、ボリングブロークもまた、不可知論をひけらかして見せるくせに、宇宙に信仰を求めていたわけですね。そして彼は、自然がホモ・サピエンスよりマシな種類の理性をどこかで生み出しているという想定なしには不可能に思えた、ということです。しかし人間の知性が欠陥を抱えているからといって、人間がそれに文句を言うのは不適切です。位階のうちこの地上にあるのはごく一部だけで、人間はたまたま、完全に非理性的というわけではないけれど、全体としてはとてもバカな生物として、その系列のある地点を占めているのです—それは人間の暮らす惑星の上では、他のどれよりもちょっとばかり高いけれど、最高のものから見れば、比べものにならないほど低い地点なのです。もしその最高の存在が、それなりの制約を持ち、欠点を抱えているなら、この仕組みは未完成となり、したがって不完全となってしまいます。ポープは、これと同じ人間に対する軽侮を、四行の手厳しい詩にしています。

卓越した存在が最近になって
死すべき人間が自然の法則を解明したのを見て
地上の姿がこれほどの知恵を持つのに感心し
人がサルにするようにニュートンを見世物にしましたとき²³。

同じ発想を、カントはもっと嬉々として展開しています。

人間の天性は、言わば存在の位階における中間部分を占めている（中略）両極端から同じ位離れているのだ。木星や土星に暮らす、最も崇高な理性的生物について考えることで、人間がうらやましさを感ずる、自分についての劣等感で卑下してしまうなら、人間性の完成度よりはるかに低い、金星や水星に暮らす低い位階の存在に目を向け

²² *Fragments, etc.; Works*, vol. VIII, 173; cf. id., 279. Young における同じ発想としては前出 p. 139 参照。Leet. IV で指摘されたように、この考察はクザーヌスが先取りしていた。

²³ *Essay on Man*, Ep. II, II. 31-34.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

ることで、自信と満足感を取り戻すことができるだろう²⁴。

しかしカントは各惑星の間の理性度合いの配分が、このように不平等である理由を見つけた、と自分では思っています。これは彼の哲学的な展開の中で初期のもですが、その中で彼は、精神的機能はそれが関連している物質的な肉体の構成により条件づけられることをまったく疑っていません。「人間が、その概念や表象のすべてを、宇宙が肉体を通じて与えてくれる印象から導き出すのはまちがいない」。そしてそうした印象を「比較し組み合わせる能力、つまり思考能力と呼べるものですら、創造主が与えた物質の構成に完全に依存している²⁵」。さて惑星の太陽からの距離が大きければ、それだけ受け取る太陽熱とエネルギーは減ります。そして生命と知性がもっと遠い惑星で維持されるためには、その惑星上に存在する生命体を構成する質料は、「軽く微細」でなければならず、生命体の整理構造は、動物も植物も、繊細かつ綿密に組織されていなければならない。よってカントは、次のような法則が「蓋然性は完全に確実よりわずかに劣る程度」で存在すると述べます：

思考する性質の卓越性、理解の素早さ、その外部世界の印象から与えられる概念の明晰性と明確性、そうした概念を組み合わせる能力、そして最終的にはその実践面での効率性、要するにその完全性のあらゆる範囲が、太陽からの居住地の遠さに比例して、ますます高次でますます完全なものとなる²⁶。

したがって「人間の知恵の鈍重さ」、その観念の混乱ぶり(Verwirrung)、極度のまちがえやすさ、道徳的性質の劣悪さ—こうしたすべてについてカントはボリングブロークに負けず劣らず痛感しています—は、人間の精神が「粗野で不活性な質料」に依存しているための必然的な結果なのです。しかし外部の惑星住民たちは、こうした精神活動に対する物理的な障害から完全に自由なのです。

こうしたより高き天球の幸運なる存在たちは、知識の進歩において達成できぬものなどないであろう！ その理解の明晰さは彼らの道徳的条件に、何と云うすばらしい影響を及ぼすことだろうか！（中略）そうした思考性には、神ご自身がどれほどその気高き性質の刻印を及ぼすことだろうか、そして（中略）それは情熱の嵐に乱されることなき静かな海のように、そのお姿を受け取っては反射し返すことだろうか！²⁷

²⁴ *Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels* (1755), 133. この理論の示唆をカントが得たのは、ポーブ経由でボリングブロークからだったということは十分に考えられる。同じページでカントは、ポーブを崇拜をこめて引用しており、そこから彼の宇宙論考察における三部それぞれの冒頭に引用されているモットーを採っている。カントの宇宙論の大半は、『人間論』第1書簡の「哲学」を散文にして拡大したものだと言っても過言ではない。

²⁵ *Ibid.*

²⁶ *Ibid.*, 129-133.

²⁷ *Ibid.*, 134. カントはまた「同じ原因」つまりそうした肉体的構成の優越性が、そうした惑星の住民に、人間よりもずっと長い寿命を与えそうだと考えていた。 *ibid.*, 136-137.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

こうした、キテレッツながらも楽しい考察にケチをつけるのは、野暮というものでしょうね。しかし、ここで私たちが歴史を検討しているプラトン主義的伝統の原理が、18世紀の最も優れた精神にすらどれほどの影響力を持っていたかを、これ以上ははっきり示すものはなかなか見あたりません。この例がなおさら重要なのは、すでに見た通り、カントはあらゆる天球に意識ある住民がいるなどと主張するところまで行っていなかったからです。それでも、まともに/理性的に秩序だった宇宙においては、そうした天球のほとんどには生き物がいるはずで、生命や知性がこんな小さな惑星に限られるなどということはあるはずがなく、存在の位階は人間よりはるか上にまで伸びているはずだ、というのをほぼ確信していたのです。カントもまた、人間ほど貧相な生き物が、自然の生み出す最高のものとはほど遠いという考えに慰めを見出します。必然的に劣った惑星上の、人類の中で最も傑出した成果についてですら、木星人や土星人たちは上から視線の哀れみを込めて見下すばかりなのです。カントは最後に、ポープの詩をパラフレーズしてみせます。こうした他の天球上の高等生物たちは「ニュートンのような存在」を、私たちがホッテントットや類人猿を見るかのように見ているはずだ、というのです。

ボネットも1764年に、存在の連鎖の完全性という想定から、他の天球の住民についての考察を導き出します。どんな二枚の葉も、動物も、人も、完全に同じということはないというのが自然の法則なので、同じことが惑星や恒星系についても言えるはずだ、というのです。

この世界の特徴である存在の詰め合わせは、おそらく他のどこにも見つからないであろう。それぞれの天球はその独特の経済や法則や産物を持っている。我々のものに比べるとあまりに不完全で、そこには(中略) [無生物] 存在しかないところもあるだろう。逆に他の世界はあまりに完全で、そこには高い階級の存在しかないかもしれない。後者の世界においては、岩も有機体であり、植物にも感覚があり、動物には理性があって、人間は天使なのである²⁸。

3. 人間の高い地位は失われ、サルに毛が生えた存在にすぎなくなった

しかしいまの話は、伝統的な神学がながくこだわり続けていた、奢るなかれという根拠でもありました。教会は常に、個人たる人間が神とともに慎ましく歩き、宇宙的な階級の中で自分より上にいる無数の生物たちに対する劣等性を忘れるな、と常に戒めていましたから。しかし教会はしばしば、位階の中で自分より下にいる生き物の中で誇り高く歩けとも奨励していました。聖なる理性の知的な光に参加することで、人間は最も高い動物からも、尊厳

²⁸ *Contemplation de la Nature*, 2d ed. (1769), I, 23-24. 惑星世界の最高のものさえさらに超えたところには「天の階層」がそびえているのだ、とボネットは付け加えている。Ibid., p. 84.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

においては隔絶した存在なのではないか、というわけですね。しかし連続性の原理の意味合いを本気で考え始めると—教会の偉大な神学者たちはこの原理を教えていました—人間は、その最も近い非人間生物種なるものから、心理的にも肉体的にも、きわめてわずかししか隔たっていないとしか考えられないという話が導かれてしまいそうです。不思議なのはむしろ、この結論がおおむね、きわめて遅まきにしか出てこなかったということです。アディソンは、*nexus utriusque mundi* [両世界をつなぐ存在]、つまり獣と知的性質のリンクという人間の地位を誇るべきものと述べつつも、この問題についての思索を次のように終えているのです。

ある面では天使や大天使とつながっていて、無限の完全性を父として見上げてよく、精霊の最高位の者たちを兄弟とできる人間が、別の面では腐敗に対して汝は我が父と呼び、ミミズに汝は我が妹と呼ぶような存在なのである。

明示的に連続性の原理を出発点に議論を進めたボリングブロークもまた、人間のあまりに高すぎる自負を実に熱心に引きずり下ろそうとしました—その一方で、一部の人は人種的な自己卑下をやりすぎていると彼は感じていたのです。人間は確かに「この惑星の主たる住人であり、その他すべての生き物より優れている」。しかしその優越性は、程度問題でしかなく、しかもきわめてわずかな程度しか優れていないのです。

有神論哲学者や聖職者どもは声をそろえて、それ[理性]こそが神の人間に与えたもうた、他とは一線を画する贈り物だと豪語し、それこそが人間の傑出性をもたらして、仲間の生物たちを支配する権利を与えるのだ、と述べてきた。(中略)人間は神の魂の一部なのだ、と述べる連中もいた。もっと慎ましく、人間は創造物ではあると認めつつ(中略)位階の中できわめて高いので、至高存在を除けばそれ以上に高いものはないのだ、と述べてきた。(中略)

この両極端の間に中間点があり、真実はそこにある。探せばだれにでも見つかる。(中略)そこで見つかるのは、人間知性と隠しの動物との様々な度合いの比較だ。知的能力と肉体的な感覚は、同じモノやちがった種類のものも、ある程度は各種の動物すべてに、ある程度の比率で与えられているのかもしれない、と考えたく成るであろう(後略)²⁹。

人間は、その天性、したがって全自然の作者の設計により、動物たちのあらゆる種族とつながっており、しかもその一部との距離はあまりに近いので、人間の知的能力とその動物の知的能力は、本当に生物種の間がちがいのだが(とはいえそれだけではないが)、多くの場合あまり差がなく、おそらくは彼らの行動を観察できるように

²⁹ *Fragments, or Minutes of Essays in Works* (1809), VIII, 168-169. Cf. 346: 「他の動物を見下ろすと、距離は見取れる。彼らと人間の間には、容易に測れる程度の差しかない」

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

その動機まで知る手段ができたなら、その差はさらに縮まって見えるであろう³⁰。

ポーブは、こうした考察を詩に翻訳したとき、ボリングブロークの間を取る議論のもっと明るい側面を強調するようにしました。

Far as Creation's ample range extends,
The scale of sensual, mental powers ascends:
Mark how it mounts to man's imperial race,
From the green myriads in the peopled grass.
How instinct varies in the grovelling swine,
Compar'd, half-reasoning elephant, with thine!
'Twixt that, and reason, what a nice barrier,
Forever sep'rate, yet forever near!
Remembrance and reflection how ally'd !
What thin partitions sense from thought divide!
And middle natures, how they long to join,
Yet never pass th' insuperable line!
Without this just gradation could they be
Subjected, these to those, or all to thee!
The pow'rs of all subdu'd by thee alone,
Is not thy reason all these pow'rs in one?³¹

[訳注：まあ程度はどうあれ人間はやっぱ地球で一番だぜ、という詩。訳さないでいいしょ？]

ポーブは、この最後の部分でもっと伝統的な議論に回帰はしますが、他のどころでは人間が「神の支配」だった「自然状態」から墮落したのは高慢の摘みのせいだとしています—聖書のお話における人間の失樂園の話ではなく、他の動物たちから不当に人間を引き離すことになった高慢の話です。

Pride then was not, nor arts that pride to aid;
Man walk'd with beast, joint tenant of the shade;
The same his table, and the same his bed;
No murder cloath'd him and no murder fed.
In the same temple, the resounding wood,

³⁰ *Fragments, etc.; Works*, VIII, 231.

³¹ *Essay on Man*, I, II. 207-210, 221-232.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

All vocal beings hymn'd their equal God!³²

[訳注：でも奢っちゃいけないぜ、という詩。訳さないでいいっしょ？]

ソアメ・ジェニングスは、この連続性の原理から出てくる結果を和らげようとして、人類の間にも様々な度合いの知性が見られる点にこだわります。最高の動物と最低の人間との間の心理的なちがいはほとんどわからないくらいとはいえ、そうしたものと、人類で最も恵まれた文明的人類との間にも実にたくさんで広範なグラデーションがあるだろう、というわけですね。

The farther we inquire into the works of our great Creator, the more evident marks we shall discover of his infinite wisdom and power, and perhaps none more remarkable, than in that wonderful chain of beings, with which this terrestrial globe is furnished; rising above each other from the senseless clod, to the brightest genius of human kind, in which, though the chain itself is sufficiently visible, the links, which compose it, are so minute, and so finely wrought, that they are quite imperceptible to our eyes. The various qualities with which these various beings are endued, we perceive without difficulty, but the boundaries of those qualities which form this chain of subordination, are so mixed, that where one ends, and the next begins, we are unable to discover. . . . The manner by which the consummate wisdom of the divine artificer has formed this gradation, so extensive in the whole, and so imperceptible in the parts, is this: - He constantly unites the highest degree of the qualities of each inferior order to the lowest degree of the same qualities belonging to the order next above it; by which means, like the colours of a skilful painter, they are so blended together, and shaded off into each other, that no line of distinction is anywhere to be seen. . . . Animal life rises from this low beginning in the shell-fish, through innumerable species of insects, fishes, birds, and beasts, to the confines of reason, where, in the dog, the monkey, and chimpanze, it unites so closely with the lowest degree of that quality in man, that they cannot easily be distinguished from each other. From this lowest degree in the brutal Hottentot, reason, with the assistance of learning and science, advances, through the various stages of human understanding, which rise above each other, till in a Bacon or a Newton it attains the summit³³.

³² Ibid., III, II. 151-156.

³³ Soame Jenyns, *Disquisitions on Several Subjects*, I, "On the Chain of Universal Being," in *Works*,

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

[訳注：下等な動物から人間まで位階があるし人間の中にも序列あるよ、という一節]

しかしジェニンスは付け加えます。

他の地上の生物に比べて人間が持つ優越性は、宇宙存在の莫大な計画に比べれば、太陽からの熱と距離に比べて私がいま書いている紙の上端と下端との間の気候差程度の、ないも同然のものでしかない³⁴、

この種の発言は、著者にとっても当時の読者にとっても、18世紀前半においては、人間と位階の中で次にいる動物とが親族だという意味合いは持たないのが通例でした。しかしそうした血縁関係についての信念は重要なものなのは、人間の自己評価においては、それが人間の性質の突出性を最小化し、人間とその他の地上生物との間の広い溝を否定するという限りにおいてのことです。そして、その連続性の原理の溝は、すでに生じ始めていた種の変化という仮説により、18世紀の人々の多くにとっては橋渡しされてしまっており、もはや受け入れられなくなりつつあったのです。だから生物学的進化論の影響だと言われることが多い一つの結果は、実はそのドクトリンが確立して一般に広がるずっと前に、すでに回頭しており、進化論とはかなり独立して生じていたのでした。

4. 心と精神を両方持つ気高い存在のはずが、最低の精神しかない存在になった

しかしながら、低位の生き物と人間との隔たりが、ほとんどわからないほどの小さな差に貶められたというだけではありませんでした。人間を「中間のリンク」とする定義の通常の意味合いでは、人間のつくりの得意な二重性と、そこから生じる悲喜劇的な内面の不調和を特に強調していました。人間は自分と調和が取れていない生き物だという事実は、もちろん、主に存在の連鎖という概念の影響によるものでした。プラトン主義の他の要素や、キリスト教における「肉」と「魂」のパウロ的な対立は、人間性のこの二重性理論を、西洋思想における支配的な概念の一つにしてきました。そしてこの概念に教化された無数の世代の道徳的な体験は、これに対する強力な裏付けを与えるようでした。しかし宇宙を構成する階層化された位階において人間に割り振られた場所はこの概念をさらに先鋭化させ、形而上学的な必然性の雰囲気さえもたらしたのです。この位階のどこかには、単なる獣の系列が終わり「知的」系列が、その愚鈍で粗野な始まりを開始するところがあるはずで、人間こそがその生き物だ、というわけです。したがって人間は一何か偶発的な無垢からの転落や、邪悪な霊の倒錯した姦計などの結果ではまったくなしに、宇宙的な物事の仕組みの必要性から一対立する欲望や傾向に引き裂かれているのです。2種類の系列に同時に加わっているため、

1790 ed., 179-185.

³⁴ Ibid.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

人間はその両者の間でフラフラして、どちらにもじっくり落ち着けないのです。こうして人間は、結局のところ、自然で確かにある種の独特な性質を持っていることになります。しかし、それはあまり嬉しくない独特性です。人間は、連鎖の中の他のどんなリンクにも見られないような形で、奇妙なハイブリッドの化け物なのです。そしてこれが人間にある種の哀れな崇高さを与えるとしても、それは同時に気持の不調和、行動の不整合、野心と能力の乖離をもたらし、おかげで人間はバカげた存在になってしまうのです。位階の二つの大きな部分をつなぐリンクという人間の地位が持つこの側面こそ、ポープが引用するにはあまりに有名すぎる一方で、あまりに完璧にこの概念を描き出す韻文で描いたものです—そしてポープの詩的な様式の絶頂としてあまりに見事すぎるので、引用しないわけにはいきません。

*Plac'd in this isthmus of a middle state,
A being darkly wise and rudely great,
With too much knowledge for the sceptic side,
With too much weakness for the stoic pride,
He hangs between; in doubt to act or rest;
In doubt to deem himself a god or beast;
In doubt his Mind or Body to prefer;
Born but to die, and reas'ning but to err;
Chaos of Thought and Passion all confus'd,
Still by himself abus'd, or disabus'd;
Created half to rise, and half to fall,
Great lord of all things, yet a prey to all;
Sole judge of Truth, in endless error hurl'd;
The glory, jest and riddle of the world.³⁵*

[訳注：人間は知恵も身体も中途半端で哀れだねえ、という詩]

ハラーは、同輩たる人間を「*unselig Mittel-Ding van Engeln und van Vieh*[天使と家畜の不幸な中間存在]」と呼び、人間が同じ宇宙のパラドックスだと示します。

*Du pralst mit der Vernunft, und du gebrauchst sie nie.
Was helfen dir zuletzt der Weisheit hohe Lehren?
Zu schwach sie zu verstehn, zu stolz sie zu entbehren.
Dein schwindelnder Verstand, zum irren abgericht,
Sieht oft die Wahrheit ein, und wahlst sie dennoch nicht ...
Du urteilst überall, und weist doch nie warum;*

³⁵ *Essay on Man*, Ep. II, 11. 3-10, 13-18.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

*Der Irrthum ist dein Rath, und du sein Eigenthum.*³⁶

[訳注：人間は知恵があるのにまともに使わないどうしようもない生き物、という詩]

しかしこのスイスの詩人は、すでにこの世紀の他の作家たちがこだわった、これを補う二つの慰める考察を付け加えます。地球よりもっと幸福な住民のいる他の天体があるし、いずれにしても人間の不完全性は、存在の階層の充満性にとっては欠かせないのだ、というものです。

*Perhaps this world of ours, which like a grain of sand
Floats in the vast of heaven, is Evil's fatherland;
While in the stars perhaps dwell spirits far more fair;
Vice reigning ever here, Virtue triumphant there.
And yet this point, this world, whose worth appears so small,
Serves in its place to make complete the mighty All*³⁷.

[訳注：地球は邪悪の祖国で、他の星はもっといいかもね、でも完全さのためにはダメなヤツも必要なよ、という詩]

18世紀思想、特に中盤以降には、ここでの主題には関係ない他の思潮もあり、それが人種としての自己卑下流行に反発し、続く世紀の大きな特徴となる、人間の悲惨な自己幻想の道を整えることとなります。それに対して私たちの現代は、同じくらい悲惨なことに、ほとんどまともに反撃してしません。しかし存在の連鎖の宇宙論的な発想にまとめられた、観念複合体の巨大な影響は、主にここで考察している時代には、ものごとの仕組みの中で人間の矮小性を不当なまでに自覚させ、決して不健全とはいえない謙虚さと自己不信を促進するほうに主に作用したのです。

B. その倫理的、政治的な帰結

これを含め、この概念の各種側面から、実に様々な実務的な道徳が、少なくとも18世紀においては導き出されたのです。以下にそれを三つ挙げます。

1. 分をわきまえろ、善くなろうとするな！
2. 敗北主義：人間なんてどうせ低劣な存在！
3. 社会的格差の正当化

³⁶ *Gedanken über Vernunft, Aberglauben und Unglauben.*

³⁷ *Über den Ursprung des Übels, III.*

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

[訳注：原文にはないが各説明が長すぎて見通しが悪いので、まず一覧にしておきます]

1. 分をわきまえろ、善くなろうとするな！

18世紀初頭に、こうした中で最も重要で最も特徴的だったものは、不完全性の説教とでも呼べるでしょう—慎ましい凡庸さの倫理です。位階のあらゆる部分は埋めねばならないし、それぞれは他のあらゆる階級と差別化するその特別な制約のおかげでその部分となっているので、人間の責務はその位置を守り、それを超越しようとしなすことなのだ、というのです—でも人間はそれなのに、それを超えようとしたがるという特長を持つのですね。与えられた階級にとどまるための善は、その種類に従属し、その系列におけるその位置、またはその種の一を定義する観念そのものを表現することなのだ、というのは自明に思えました。すると、人間の天職として達成すべき、人間だけに固有の卓越性があるはずで—その卓越性は、天使や神のものと混同してはいけなすし、獣のものとも別であるはずです。そして宇宙的な秩序の中で、自分の上の存在が持つ特徴的な行動を欲しがったり真似たりするのは、低い位置に転落するのと同じくらい不道徳なのです。こうした倫理の手法は、人間の実際のつくりを考慮して—その特長となる本能、欲望、自然な能力—そうしたものをバランスのとれた実践可能な形で満たすという形で善を構築する、というものでした。そして人間は、獣と知的要素のごたませだから、位置はあまり高くないし、そして知的な要素は実に貧相な量しかなく、しかも最低か最低に近い形でしかないので、人間にとっての叡智はまず、自分の制約を忘れず、それを堅持するところから始まるのです。

この中間のリンクの倫理については、これまたポープが、最初ではないにしても主要な使徒でした。

人間の至福は（その高慢さがこの恵みを見つけられるなら）
人間を超えて行動や思考をすることではない
肉体の魂のどんな力をもってしても
その天性と状態にかなうものしか実現できない³⁸。

ルソーは『エミール』でポープのお説教を繰り返しています。

おお人間よ！ 汝の存在を汝だけに限定すれば、もはや惨めではなくなる。自然が存在の連鎖で汝に割り当てた場にとどまれ、何ものも汝にそこから離れるよう説得はできない。（中略）人間は、ありのままの自分であることに満足すれば強い。人間より高い存在に上がろうとすれば弱くなる。

³⁸ *Essay on Man*, I, II. 189-192.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

この道徳的な気運が最も表現されたのは、「高慢」に対する絶え間ないお説教の中でのことでした。これはポープなど当時の多くの著者たちの十八番でした³⁹。高慢は「秩序の法則に対する」罪です。秩序の法則とはグラデーシヨンの法則ですね。これは普遍原因に逆らおうとする試みであり、宇宙の仕組みそのものを乱そうとするものなのです。

高慢、高慢による弁解に人の誤謬あり
すべておのれの天球を捨てて天に走りたがる。
さらなる高慢は恵まれた居場所を目指し
人が天使に、天使が神になろうとすること。

ここから人間は精神のもっと広い活動をすべて戒めるべきなのです。人間はそうしたもののために意図されていないし、そんな能力もないのです。「しからば科学を導きとするにも慎みを持って」。そして学習のあらゆる虚栄、誤謬、邪魔物がすべて排除されたら

残った合計がいかにかいかに小さいかを見よ
それで過去は務まったし、これからも対応するのだ！

ここでは存在の連鎖の発想—そしてその「中間のリンク」としての人間—は一種の理性的な反知性主義をもたらしたのです。しかしそれはまた—倫理の基盤にされたときにはもっと野心的で厳格な道徳的理想すべて、たとえばストア主義/禁欲主義などの軽蔑へとつながりました。何よりも、この同じ発想はキリスト教とプラトン主義の伝統で常に特徴となってきた、あの異世界性の公然とした全面的否定につながったのです。ポープはバカにして次のように書いています。「いけ、妄想まみれの生き物よ！」

プラトンとともに最高天を翔び
第一善、第一完全、第一美の世界に遊んだり
あるいはその追隨者のたどる迷路に惑い
正気を失い神の模倣をするがいい
東洋の神官がグルグル走ってめまいを起こし

³⁹ このさらなる例示としては cf. 拙稿 "Pride in Eighteenth Century Thought," *Mod. Lang. Notes* (1911), 31 ff. モンテーニュは *Apologie de Raimond Sebond* でこう書く: "La présomption est notre maladie naturelle et originelle. La plus calamiteuse et fragile de toutes les créatures, c'est l'homme, ... et la plus orgueilleuse." [思いこみは人間の自然かつ原初の病。あらゆる生物で最も悪辣で脆いのは人間 (中略) そして最もプライドが高い] この主題はラ・ブリュエールとラ・ロシュフーコーお気に入りのものだったが、二人は主に人種的な高慢よりは個人の高慢の遍在性にこだわった。そして17-18世紀の「人間についての戯画」の実に多くは人間の高慢にこそ人間の至高の愚かしさを見出している。

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

頭をまわして太陽を真似たりするように

ここで、この講義の冒頭で仕分けたプラトン主義の二つの潮流が、完全に分離して、片方がもう片方を圧倒しました「上がる道」という発想、*ascensio mentis ad Deum per scalas creaturarum* [創造物の階段を通じて神の精神へと上昇] は放棄されました。しかしその放棄の主要な哲学的理由、下手をすると最も強力な動機は、プラトン主義の伝統で常に同じくらい特徴的だった充満の原理にあったのです。そしてこの原理からの演繹は、これまでしつこくお示してきたように、少なくとも一貫性がある、もっともらしいものでした。もし宇宙において連鎖の可能なリンクがすべて永遠に表象されねばならず、この考察が宇宙論的な一般論から道徳的な指示へと向けられるなら、当然ながら *imitatio dei* [神の模倣] など人間のやるべきことではなく、位階を上ろうなどというあらゆる活動は、聖なる目的に対する反逆、自然に対する犯罪となるのです。このような主張を行った者たちが当然思いつけたはずの—でもどうも思いつかなかつたらしい—疑念は、世界の完全性が永遠動因により十分に保証されているのだと想定しなくてもいいのでは、というものでした—もし世界が途切れぬ存在の連鎖であるべきだというのが物事の性質においての必然なら、連鎖のリンクのどれかがその場を離れ、次のような事態を引き起こすことは絶対にないのか、ということです：

創造の完全性に空虚を残し

一段が壊れて偉大な位階が破壊される

2. 敗北主義：人間なんてどうせ低劣な存在

宇宙における人間の立ち位置がつまらないものだという想定は、このように人間の精神的な能力に適用されると、さらに大きな意味合いを含んでいる、あるいは含んでいると言えそうだし、当時の陰気またはもっとタフな精神の持ち主たちはそれを見逃したりしませんでした。こんなに制約だらけで、他の動物とも血族関係はなくても似通っている人間などという生き物は、必然的に大した政治的な叡智も美徳も達成できず、したがって、政治行動や社会組織においては、大した改善は期待できないよ、ということです。ソアメ・ジェニングス曰く「あらゆる人間統治には無数の不完全性が内在して」おり、それらは「宇宙における人間の地位の劣等性のみによるもので、それが必然的に人間を自然及び道徳的な邪悪に曝し、したがってその同じ理由から、政治的、宗教的な悪にも曝されるのである。これはまさに、前者の結果にすぎない。優れた生物はおそらく圧政や腐敗のない統治を自己形成したり、創造主からそれを受けたりするのだろう。(中略) だが人間にはそれができない。神は実際、人間を実に遠くの社会に離してしまっただが、人間であり続けつつも、無数の邪悪にさらされねばならないのである」—たとえば「圧政や抑圧という悲惨な負担、暴力、汚職、戦争、荒廃など、あらゆる国民が統治のおかげで苦悶してきたものである。(中略) だがそれはあら

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

ゆる人間の統治のまさに本質に、人間の欠陥のおかげで編み込まれているのであり、それなしにはどんな統治も樹立、維持、行使できず、結果としてその欠陥を完成に変えずしてそれを阻止することもできないのである。つまり、その人間の本性を完全に変えなければ不可能なのである⁴⁰。したがって、まともな形の政府など、昔もこれからもまったくあり得ないのだ、とジェニズは結論します。一部は確かに、他よりはマシだろう。だが既存の秩序を辛辣に糾弾して、それを急激に変えようと夢見る連中は、この根本的な真実を忘れている――「こうしたあらゆる邪悪は物事の性質と人間の天性から生じるのであり、ある特定の人物の弱さや邪悪さから生じるのではないし、そうした人物が偶然にある政府の中で出世した結果でもない。そのひどさの度合いは確かにそうした理由で生じるかもしれないが、そうした政府の欠点は不変なのである⁴¹」

存在の連鎖の発想と、そこにおける人間の位置からの類似の含意は、宗教についても同じ著者により導き出されました。天性の明かりや啓示の光によっても、人間は宗教的な知識について大した明瞭さや確実性を実現はできないのです。

God cannot impart knowledge to creatures, of which he himself has made them incapable by their nature and formation: he cannot instruct a mole in astronomy or an oyster in music, because he has not given them members or faculties necessary for the acquisition of those sciences: ... a religion therefore from God can never be such as we might expect from infinite Power, Wisdom and Goodness, but must condescend to the ignorance and infirmities of man: was the wisest Legislator in the world to compose laws for a nursery they must be childish laws: so was God to reveal a religion to mankind, tho' the Revealer was divine the Religion must be human, and therefore liable to numberless imperfections⁴².

[訳注：人間はバカであるように位置づけられているので、神様が叡智を出してもダメで、欠陥だらけの宗教しか得られない、という一節]

このような形で、充満とグラデーシヨンの原理は、いろいろな使い方がある中で、政治的な現状と受けいられている宗教の両方について、悲観的でずいぶん後ろ向きな弁明を提供するのも使えたわけですね。これは改革者の狂信性にクッションを提供しました。人間は天使ではないし、また天使になるように作られてもいないので、天使のように行動すると期待するのはやめよう。そして統治の形態や仕組みを変えるだけで、人間性の制約を終わらせ

⁴⁰ *Nature and Origin of Evil* (1757), 124-126.

⁴¹ *Ibid.*, 137.

⁴² *Ibid.*, 165-167. この議論は Jenyns の 1757 年著書へのサミュエル・ジョンソンによる書評で批判されている。

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

ることができるなどと想像する誤謬は避けようではないか、人間性は本質的に変えられない、なぜなら宇宙の仕組みに内在しており、その仕組みはまさにそうした生き物やその他すべてを必要としていたから、というわけですね。宇宙を「完全」にするためにはそれが必要だったのです。

しかしジェニンスの批判者の1人は、この前提は否定しませんでした。結論における不当な推論を見つけたと考えました（そしてその通りでした）。この議論は「単なる言葉尻のごまかしでしかない」。確かに人間は、「創造物の最高位のために計算された統治や宗教」などは期待できません。そしてこの意味では、人間のどんな政府も宗教も不完全なものしかあり得ないでしょう。しかしそうした面において、人間がそれなりの完成度を達成できない理由などないのです—「こうした統治や宗教はそれを使うべく設けられた者たちの集まりのためには、最も有益なものとなるであろう⁴³」

ここで批判者はそれと知らずに、これやこの原理の他の応用に見られる暗黙の想定をズバリ指摘しています。こうした議論では、人間は力や成果が存在の位階の中で占める地位により制約はされているのに、その地位を超えたものも見るができますし、自分の地位や、したがって自分自身に対し—良かれ悪しかれ—不満を感じることができるのです。人間は本質的に自分の性質や宇宙的な性質における立ち位置に不満なのです。そしてこれについては、聖人、神秘主義者、プラトン主義者やストア派の道徳家や改革者は、それぞれいくつかの形で証拠を示しています。しかしここで再び、充満の原理はいつのまにか自分自身と戦うことになっているのです。人間が自分の現在のつくりと地位に永遠に不満を抱くというのは、結局のところまさに人類の持つちがい、位階における人間の地位にふさわしい特長だという話ですよ。もしその地位に必要とされるものでなければ、そんな不満を持つようになるはずもないでしょう？ しかしそれが必要とされるなら、一貫性という点から見てそれを糾弾するわけにもいきません。そして可能世界の最高のものにおける、まさにその地点にこれが存在するという事は、人間は少なくとも、この同じ場所を永遠に占め続けるものとしては意図されていないという示唆だとさえ解釈できてしまうのです。この位階はまさに文字通りのハシゴであり、想像の中だけでなく実際にも上るためのものなのだ、というわけです。

議論がまさにこの方向に転回する様子はすぐに見えます。しかし充満の原理について、これほど陽気ではない解釈者はまちがいでなく、人間固有でその十八番である欠点はまさに、自分が持てない完全性のビジョンを持ち、その成り立ちからして決して達成できない美徳を夢見る運命を持つ生物だという点にあるのだ、と応えたことでしょうか。というのも、これまた可能な生物の1種類にはちがいないからです。だったら、充満した宇宙は、この悲劇的な種類のイカルスさえ含むはずではないでしょうか？ まさにこれこそが、伝統的に人間に割り

⁴³ R. Shepherd, *Letters to Soame Jenyns, Esq.* (1768), 14.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

振られてきた中間の場所が持つ、自然で普遍の結果ではないでしょうか—肉体と精神の両方にまたがる、純粋な獣と理性的な種の間にいる、中間の生物種としての？

3. 社会不平等の正当化

しかし、存在の連鎖という宇宙論的な概念が、社会的不満、特にあらゆる平等主義的な運動への反対論として使われた方法は他にもありました。宇宙は最高の体系なのだ、とされました。他のどんな体系も、同じ原理に基づいて構築されている限りでしか、いいものとは言えないのです。そしてそれを構築した無限の叡智の目的は、不平等性という手段により最大限のバリエーションを実現することでした。すると明らかに、人間社会もその限界の中で、同じ要求の実現へと向かう場合のみ、しっかり構築されていると言えるのだ、ということですね。もちろんこれは、あのポープの有名な金言の論点です。あれはさんざん誤用されて、青少年たちを苛立たせてきたものではありません。

秩序こそは天の第1の法則。そしてその教えによれば
一部のものはず他よりも偉大で
もっと金持ちでもっと賢い⁴⁴。

これはポープとしては、手すさびのトーリー主義（保守主義）に関する一説などではありません。「秩序」つまり階層的なグラデーションがあらゆるところで聖なる理性に必要とされているというのは、『人間論』における楽観主義議論の根本的な前提なのです。存在の連鎖のドクトリンは、英国国教会の教義問答の、各人は心を込めて「神がその場所に置かれたことでお慶びなされた、人生の状態における責務を果たす」よう頑張るべきだというものに、形而上学的なお墨付きを与えたのです—その人生の状態というのは、宇宙的な位階でもあり、社会的な階級でもありました。「だから引っ込んでおれ、秩序の不完全性など指摘するな」。平等性の要求はすべて、要するに「自然に反する」というわけですね。

さらにこの政治社会的な道徳を示唆した点で、ポープはまるで独創的というわけではありませんでした。ライプニッツもまた、最高の可能世界と最高の可能社会との相似性を指摘しています。

条件の不平等は邪悪 (*desordres*) に含めるべきではない。そしてジャケロット氏は正当にも、あらゆるものが平等に完全でなければならないと主張する人に対し、なぜ岩に葉がついていないのか、なぜアリはクジャクではないのかと尋ねている。平等

⁴⁴ *Essay on Man*, IV, II. 49 ff.

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

がいたるところで不可欠であるなら、貧乏人は金持ちに対して平等性要求をつきつけるし、御者も主人に平等を求めるであろう⁴⁵。

確かにこの議論は、どちらの端でも利用できます。社会の中に高い階級と低い階級があるのは当然だと思っている人々は、この想定を持ちだして、創造における神の計画により階級を正当化するわけです。このやり方でエドモンド・ローは次のように論じました。

万人が支配者になりだれも臣下にならないなど、不可能である。この例から、生物が相互に持つ関係は無限の力たる神にすら制約を課すことがわかる。このため、各種の生物は、現在持っている性質を維持しつつ、現在の状態とは一部の面でちがったものになるというのは、その生物たちにとっての矛盾となるし、またそのすべてに、同じ位階を同じ便宜で与えることも、彼らにとっての矛盾となってしまうのである⁴⁶。

マクロコスモスと社会的ミクロコスモスのアナロジーを、さらに全面的かつおめでたい形で打ち出したのは、ソアメ・ジェニンズでした。

宇宙は巨大でしっかり仕切られた家族に似ている。そこではすべての従業員や召使いや家畜ですら、適切な従属関係の中でお互いに屈従している。それぞれがその地位に固有の特権と責務を享受し、同時にその公正なる従属により、全体の偉大さと幸福に貢献するのである⁴⁷。

このアナロジーは、既存の社会秩序に大いに安住できた人々の無為無策を正当化するには貢献しましたが、これはまちがいなく、18世紀における政治思想の中では比較的小さな要因でしかありませんでした。そして、この種の保守的な自己正当化の弁明の手口を、否定はしないまでも制約した、別の意味合いがあったことは忘れてはいけません。確かに従属は不可欠でした。しかしそれは隷従なき従属だったのです。これまで見た通り、どんな生物の存在も、単に位階の上位存在の厚生道具ではなかったのです。そのそれぞれは、存在の独自の独立した理由を持っていました。そして最終的にはそのどれも他のどれより重要ということはないのです。そしてそのそれぞれは、したがって、その上位の存在からの経緯と配慮を求める権利が充分にあるし、その地位の機能を満たし、その「特権と必要性」を享受するために必要となりそうなるすべてを所有して独自の暮らしを送る独自の権利を持っているのです。この発想が持つ二重の側面—これは、正直言って、相変わらず低位の連中の慰めになるよりも、高位の人々の自己満足に貢献するものではありましたが—は、その中身にふさ

⁴⁵ *Thiodicee*, 246.

⁴⁶ King の *Origin of Evil*, 1732 ed.への注, 156.

⁴⁷ *A Free Inquiry into the Nature and Origin of Evil* (1757).

第6講 18世紀思想における存在の連鎖、および人間の居場所と自然における役割

わしい出来の悪い詩でもしっかり謳われています。

賢明なる慈愛が
各種の精神の各種の部分放つ
最もケチな奴隷や刈り耕す者どもも
その汗により金持ちを喰わせるのに有益
金持ちはその適切なお返しに蓄えを放出し
それが労働する貧困者をしっかり喰わせる。
また金持ちは最低の奴隷も軽蔑しない
奴隷も同じく自然の連鎖のつながり
同じ目的のために労働し一つの視野に加わり
どちらも聖なる意志を追求⁴⁸。

⁴⁸ Richardson の *Pamela*; Everyman's Library ed., I, 235. リチャードソンがこの下りを自分で書いたか引用したかははっきりしない。